

戦後の保守的学生運動の支持基盤

——維持会員名簿の統計的分析——

井上 義和（関西国際大学）

0. 関心とねらい

数年来、「若者の右傾化」現象が社会学者の関心を集めている。1990年代末から、「新しい歴史教科書をつくる会」の活動や小林よしのりの『戦争論』、サッカーW杯での屈託のない愛国心の発露、インターネット上での「嫌韓・嫌中」、ジェンダーフリー・バッシングなど、その徴候は随所に見出される。他方、伝統的な社会学は政治学とともに、社会階層と政治意識の関連を調べてきた。投票行動や支持政党の分析によれば、1955年体制という安定的な保革対立枠組みのなかで、それまで革新政党の主要な支持基盤だった若者層（および都市部・高学歴層）が、1970年代以降「無党派層」に転向していく。こうした知見をふまえて私たちは、1970年代から90年代までの若者は政治から私生活に退却しており、それはこの間、消費生活や雇用状況など若者を取り巻く社会経済的条件が歴史上例外的に恵まれていたからだ、と納得している。

おそらく“平均的”な若者の政治意識はそれで説明されるのだろう。しかしながら、「消費生活や雇用状況など若者を取り巻く社会経済的条件」の好転にもかかわらず（あるいは好転ゆえに？）、ある種の若者は政治的な危機意識を昂進させることがありうる。全体からすると“例外的”なタイプは通常のマクロな社会調査では捉えきれない。それでも1960年の社会党書記長刺殺や1970年の三島由紀夫自決といった、社会に大きな衝撃を与えた事件をきっかけに、沢木耕太郎『テロルの決算』や保阪正康『三島由紀夫と楯の会事件』などの優れたノンフィクションが書かれることはあった。果たして、世間を騒がせることなく真面目に社会生活を送っている“例外的”な若者たちについては、研究対象として捉えることが恐ろしく困難となる。

本研究の目的は、この「世間を騒がせることなく真面目に社会生活を送っている“例外的”な若者たち」を社会学的な分析の俎上に乗せることにある。

※

戦後の保守的学生運動を定点観測するひとつの拠点として、社団法人・国民文化研究会を取り上げる(*1)。同会の前身は、大正末年、第一高等学校において「外来の抽象理論に走って自国の文化伝統を軽視する学風を憂えて」結成された瑞穂会(1926)から出発し、一高昭信会(1929)に継承されて「東西の外来文化に深く学びながらも、聖徳太子の遺された文献と明治天皇の御製を研究の中心に据え、同信師友との友情を深めつつ

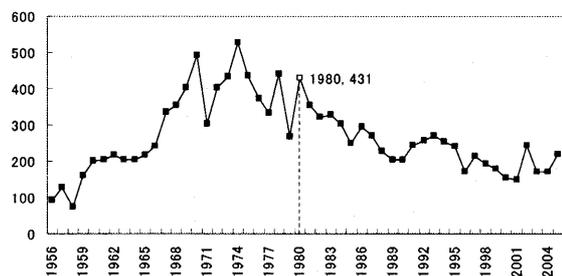
研鑽を続けた」。その系譜は、東京帝大の学内団体・東大精神科学研究会(1938)、全国学生組織・日本学生協会(1940)、民間組織・精神科学研究所(1941)へと発展し、戦時期においては東條内閣の戦争指導を批判する言論活動を展開したために検挙・解散(1943)に至る。敗戦後、「戦陣に斃れ病に逝った友人たちを慰霊する営みの中から、新しい運動への気運が高まり」結成されたのが国民文化研究会(1956)である。以来、「祖国の歴史と伝統に基づいて次世代の国民を育成する活動を今日まで展開している」（以上、括弧内は案内パンフレットより）。

同会の根本思想と研究実践は戦前から現在に至るまで変わっていない。「日本主義的教養」（竹内・佐藤編2006）の研鑽団体としては、戦後に限らず昭和期全体にわたる定点観測の拠点となりうる。

1. データの概要

社団法人・国民文化研究会（以下、会）の『維持会員名簿』（昭和56年4月版）から生年月日・現住所・勤務先・出身高校・大学といった属性情報を抽出し、592人分のデータベースを作成した。会の活動の中心的行事は、1956年以来毎年夏に開催される全国学生青年合宿教室である。維持会員というのは合宿教室への参加者OBからなり、一定の会費を収めて会を財政的に支える。加えて、社会人になって以降も合宿教室のリピーター層を形成し、実践的にも会を支えている。

図1 合宿教室の参加人員(1956-2005)

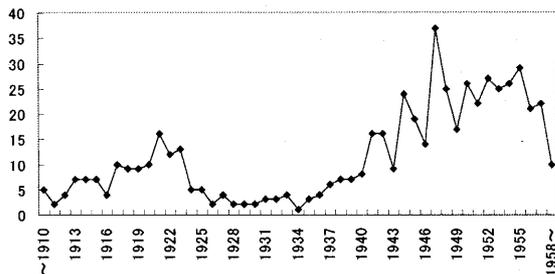


合宿教室の参加人数の推移から、会の盛衰を推し量ることができる〔図1〕。今回使用する『維持会員名簿』には1980年までの参加者が含まれている。1980年は、ちょうど1960年代後半からの隆盛の最後のピークである（昭和初年の高等学校生もまだ70歳前後で健在だった）。そして、この年を境に参加者は漸減していく。グラフの変動とその要因も興味深いが、ここでは名簿データが最盛期の会員の実態を反映していることを確認するにとどめる。

2. 暫定的な分析と問い

まず、生年別・維持会員数をみでみる [図 2]。本格的な活動再開は敗戦から 10 年後なので、その間に 20 歳前後だった会員 (1925~34 年生まれ) は極端に少ない。逆にいえば、その谷間の世代の会員は、1955 年以前から再興に向けて尽力していたか、または 1956 年以後に社会人として活動に参加したメンバーということになる。彼らを挟んで、戦時期の学生運動を知っている戦中世代 (~1924 年生まれ) と、戦後の合宿教室から参加した戦後世代 (1935~年生まれ) がいる。なお、どの世代もほとんどが高等教育まで受けている。

図2 生年別・維持会員数(1981年4月時点)



つぎに、戦後世代をさらに 3 つに分割して、出生コホート別・職業分類をみでみる [表 1]。会の再興を支えた谷間の世代は教員 (39.3%) が最も多い。戦後世代はいずれも会社員が 4 割程度で最も多いが、ついで教員が 2.5 割程度を占める。女性会員 33 人はほとんど戦後世代であるが、教員が 20 人 (60.6%) を占めている。教員・大学教員・公務員・警察・自衛隊・医師を加えた「公共部門」でみると、谷間の世代は 6 割を超え、戦後世代も 4 割程度を占め「民間部門」と拮抗している。会員のほとんどが大卒であるが、同年代の大卒者と比べて公共部門、とりわけ教員の比率の高さが注目される。

①1970 年代は左翼学生運動が衰退し革新政党が支持率を低下させ、日教組の新採加入率も下がり続ける [図 3] が、他方で会の活動は最盛期を迎えている。②維持会員数は団塊世代より若い世代 (1950 年代生まれ) で増加している。③進路としては公共部門 (とくに教員) が一貫して多い。以上の暫定的な分析結果から、さらに問いを立ててみる。この時期の「若者の保守化」は主に消極的な側面 (生活保守) が強調されてきたが、その一方で積極的な側面 (文化防衛) を見落としてこなかったか。それは現在いわれる「若者の右

表1 コホート別・職業分類

生年	公共部門					小計	民間部門			その他	総計	実数 N=550
	教員*	大学教員	公務員	警察 ・自衛隊	医師		会社員 ・銀行員	会社役員	小計			
-1924	14.7%	15.5%	5.2%	0.0%	1.7%	37.1%	11.2%	26.7%	37.9%	25.0%	100.0%	116
1925-34	39.3%	3.6%	7.1%	7.1%	7.1%	64.3%	7.1%	21.4%	28.6%	7.1%	100.0%	28
1935-44	24.5%	3.1%	4.1%	3.1%	3.1%	37.8%	43.9%	4.1%	48.0%	14.3%	100.0%	98
1945-54	24.2%	0.4%	8.7%	4.8%	3.9%	42.0%	38.5%	3.9%	42.4%	15.6%	100.0%	231
1955-	26.0%	0.0%	7.8%	6.5%	1.3%	41.6%	42.9%	0.0%	42.9%	15.6%	100.0%	77

*「教員」には幼稚園~高等学校までの教諭、および学習塾・予備校講師を含む。

傾化」とはさしあたり区別して扱う必要がある。現在の「右傾化」論は階層的没落や実存的危機に注目して、欠落感を埋めるためにナショナルなシンボルに飛びつくのだ、という説明をする。では、この時期の「祖国の歴史と伝統に基づく次世代の国民育成」という課題意識をもった公共志向の強い高学歴の若者の登場についても、同様な説明が成り立つのだろうか。しばしば“低級”と見なされ揶揄される右傾化現象とは区別して、日本主義的教養を核にすえた“良質”な保守主義階層の形成を捉えることはできないのだろうか。

【注】

(1) 国民文化研究会の思想・実践活動の詳細については小田村(1978)および公式 HP(<http://www.kokubunken.or.jp/>)を参照のこと。同会の前身である東大精神文化研究会・日本学生協会・精神科学研究所などを対象とした数少ない研究として占部(2004)、井上(2006)を挙げておく。

【付記】

社団法人・国民文化研究会『維持会員名簿』(昭和 56 年 4 月版)は古書店経由で入手したものであるが、個人情報保護の観点から慎重に取り扱うことを前提に分析に使用させていただくことについて、国文研事務局の了解を得ている。本研究へのご理解と寛大なるご対応に感謝いたします。

【文献】*詳細は当日配布

井上義和, 2006, 「戦時期の右翼学生運動—東大小田村事件と日本学生協会」竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代』柏書房所収。

占部賢志, 2004, 「東京帝国大学における学生思想問題と学内管理に関する研究—学生団体「精神科学研究会」を中心に」『九州大学大学院教育学コース院生論文集』4 号, 67~93 頁。

小田村寅二郎, 1978, 『昭和史に刻むわれらが道統』日本教文社。

図3 日教組の組織率(実線)と新採加入率(点線)

